



実感的に教育格差問題から考える 国際協力の学習

第6学年 社会科

新潟大学大学院教育学研究科 佐藤 友哉さん

1. 研究のねらい

小学校社会科第6学年では、国際協力や国際連合の働きについて学習する。この学習を通して、「世界平和の大切さと我が国が世界において重要な役割を果たしていることを考えるようにする」必要がある。[小学校学習指導要領（平成20年告示）社会科第6学年の内容(3)イ]

しかし、貧困・開発問題への取り組みの様子を取り上げた学習の多くでは、問題に対する認識や国際協力の重要性・必要性の認識が十分に深まっているとは言えないのではないか。その原因としては、①児童は貧困の経験がなく目にする機会も少ないために、それを具体的にイメージすることができないこと、②貧困・開発問題は私たちの社会生活と密接にかかわっているが、児童はそれを自らの問題として考えられないこと、③問題についての正確な事実認識の指導が行われないうまま、対策についての学習が行われたり態度化・行動化が図られたりすることなどが考えられる。

そこで、児童にとって身近な学校を学習の対象とし、学校に通える自分たちと学校に通えない子どもたちの比較や、学校に通えない子どもたちに関する写真や映像資料の活用、自分たちの生活ともかかわりのある児童労働の事例や日本が受けたユニセフ支援の事例の紹介、学校に通えないことが子どもたちに及ぼす影響についての疑似体験、学校に通えない子どもたちの問題への取り組みに携わっている人から話を聞く活動などを取り入れることで、具体的・実感的に貧困・開発問題を認識し、それを自らの問題として考え、解決に向けて行動できるようになるのではないかと考えた。

2. 実践

日時 2009年3月2日2校時、3日2校時、4日4校時、5日1、2校時、6日1、2校時

場所 新潟大学教育学部附属新潟小学校高学年3組（第5・6学年複式学級）

(1) 小単元名

どうして学校に通うの？—学校に通えない世界の子どもたちの問題—

(2) 小単元の目標

- ・学校に通うことは、人間として生活していくために欠かすことのできない様々な知識や技術、能力を身に付ける上で大切であることを認識することができる。
- ・学校に通えない子どもたちの問題の全体像とそれへの取り組みの様子を理解し、自分たちにできることは何かを考えることができる。
- ・学校に通えない子どもたちの問題の解決には、地球規模での努力や国際協力などが大切であることを認識することができる。

(3) 小単元の展開（全7時間）

	学習活動	指導上の留意点と教師の発問・指示
1	<導入> ○自分たちが学校に通う理由や学校に通える理由、学校の果たす役割を考える。	・多くの時間を学校で過ごしていることを確認する。 ○「どうして私たちは学校に通うのでしょうか」「どうして勉強するのでしょうか」「学校で勉強するためには何が必要でしょうか」

<p><事実・課題の認識> ○世界の子どもたちが学校に通えない状況を知る。</p> 	<p>○「すべての子どもたちが私たちと同じように学校に通えるのでしょうか」「小学校に通う年齢になっていても学校に通えない子どもたちは、世界にどのくらいいるのでしょうか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校に通えない子どもたちの人数を、附属新潟小学校の児童数、新潟市の人口、新潟県の人口、日本の人口と比較するクイズを出す。 ・日本とチャドの初等教育純就学・出席率、小学校の第1学年に入学した子どものうち、最終学年にまで在学する子どもの割合を疑似体験（割合に応じて立たせたり座らせたり）させる。 ・統計図表から、サハラ以南のアフリカや南アジアの就学・出席率が低いこと、学校をやめてしまう子どもたちがいることなどを読み取らせる。
<p>2 <原因の考察> ○世界の子どもたちが学校に通えない理由を知る。</p> 	<p>○「世界の子どもたちはどのような理由で学校に通えないのでしょうか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵本、ビデオ、写真などから、世界の子どもたちは働かなくてはいけない、学校が近くにない、学校に通うためのお金がない、弟や妹の世話をしなくてはならない、紛争に巻き込まれてしまった、親が学校に通わせてくれない、重い病気にかかってしまった、学校に先生がいないために学校に通えないことを読み取らせる。 ・水運びを疑似体験させる。 ・サッカーボールを作る子どもたちの事例を紹介して、児童労働は自分たちの生活ともかかわりがあることを意識させる。
<p>3 <影響の考察> ○学校に通えないことは子どもたちにどのような影響を及ぼすのかを知る。</p> 	<p>○「学校に通えないことは子どもたちにどのような影響を及ぼすのでしょうか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが学校に通うことによってできるようになったことを考えさせる。 ・統計図表、新聞記事、ビデオなどから、学校に通えないと読むことや書くことができない、計算することができない、命の危険につながる、安定した仕事につけない、貧しさから抜け出せないことを読み取らせる。 ・非識字の状態を疑似体験させて、読むことや書くことができないと様々な知識や技術、能力を身に付けることができないことを読み取らせる。
<p>4 <対策の検討> ・ ○学校に通えない子どもたちの問題の解決に向けて、世界でどのような取り組みが行われているのかを調べる。</p> <p>5</p> <p>6</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・問題の解決には、世界の子どもたちが学校に通えない理由を解決する必要があることを確認する。 <p>○「学校に通えない子どもたちの問題の解決に向けて、世界でどのような取り組みが行われているのでしょうか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題の解決への取り組みを行っている組織で、知っているものを出し合わせる。 ・日本が受けたユニセフ支援の事例を紹介する。 ・パンフレットから、ユニセフの活動について調べさせる。 ・ビデオから、問題の解決に向けた取り組みに携わっている人の思いや願いなどをとらえさせる。（エリトリア、南アフリカ共和国、レソトでの学校図書館整備やエイズ予防教育についての話）
<p>7 <主体的思考> ○学校に通えない子どもたちの問題の解決に向けて、自分たちにできることは何かを考える。</p>	<p>○「学校に通えない子どもたちの問題の解決に向けて、私たちにできることは何でしょうか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題の解決に向けて、今の自分にできること、10年後の自分ならできそうなことを考えさせる。
<p><終結> ○小単元の学習のまとめ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習を振り返り、感想や意見をまとめさせる。

(4) ユニセフの活用方法

本実践におけるユニセフの主な活用方法は次の5点である。

- ①写真の多くは、日本ユニセフ協会から提供を受けた。
- ②統計図表は、UNICEF「THE STATE OF THE WORLD'S CHILDREN 2009」(<http://www.unicef.org/sowc09/docs/SOWC09-FullReport-EN.pdf>)、「Childinfo」(<http://www.childinfo.org/>) などより作成した。
- ③水運びを疑似体験させるために活用した水がめは、日本ユニセフ協会から貸し出しを受けた。疑似体験と絵本「家事や水くみに追われなかなか学校に通えない少女の事例」(ワールド・ビジョン・ジャパン編『この子を救えるのは、わたしかもしれない』小学館、2008年)を組み合わせることによって、学校に通えない子どもたちの現状を実感的にとらえさせることができた。
- ④学校に通えない子どもたちの問題への取り組み(ユニセフの活動)を調べさせるために、日本ユニセフ協会発行「ユニセフ手帳」「ユニセフと世界のともだち」を活用した。
- ⑤学校に通えない子どもたちの問題への取り組みに携わっている人から話を聞く活動を取り入れるために、日本ユニセフ協会の菊川穰氏にご協力をいただいた。学校に招くことは困難であったので、授業者がユニセフハウスに出向いて撮影した映像を活用した。この活動によって、国際協力の重要性・必要性の認識をより深めることができた。

(5) 児童の感想・意見

以下は、児童が小単元の学習を振り返り、感想や意見をまとめたものである。

私は、前から学校に行けない子どもたちがいると知っていました。でも、それがどうしてなのかは知らうとしませんでした。前から募金をすれば学校に行けるようになる子どもがいると知っていました。でも、募金でどうやって学校に行けるようになるかは知らうとしませんでした。でも、佐藤先生の社会でよく知ることができました。

学校に行けない理由で一番心に残ったのが、紛争に巻き込まれてしまったという理由です。子ども兵士にされ、心が傷ついて話すこともできなくなるというのを聞いて、私だったとしても「耐えられないだろうなあ」と思いました。なので、それを救っているユニセフの人はすごいと思いました。他にも、児童労働を禁止することを訴えたり、予防接種をするなど、ユニセフには尊敬すべき点がたくさんありました。

ユニセフの人たちは他にも、私たちだけでもできる協力の仕方(募金)などの活動のやり方なども教えてくれました。「ユニセフ・ハンド・イン・ハンド」などは、自分でもできていいなと思いました。あと、この授業で、「ユニセフの人は、何でユニセフに入ろうと思ったのかな?」と思っていましたが、菊川さんのビデオを見て参考にできてよかったです。

最後に、私がユニセフや学校に行けない子どもたちについて勉強して、良かったと思うことが2つあります。1つ目は、事の重大さに気付いたということです。一握りの人しか問題について分かっていなかったら、解決することも解決しないからです。2つ目は、「ユニセフに協力しよう!」と思えたことです。ユニセフだけでなく、自主的にというのも大切ですが、ユニセフの人たちと協力すれば、もっと的確にできると思うからです。

やっぱり、この勉強をしてすごくよかったです。

この児童は、1時間目の学習の感想・意見に「(世界の子どもたちが学校に通えない状況を知って)『日本に生まれてよかったなあ』と思いました」と記述していた。

他の児童は、「学校の大切さを学ぶことができました」「世界のことについてもっと調べよう。そのことについて自分ができることを考えようと思いました」などと記述していた。また、募金に協力した児童もいた。

3. 成果と課題

実践に取り入れた様々な手立ては、児童が問題に対する認識や国際協力の重要性・必要性の認識を深める上で効果的であったと考える。また、ユニセフの資料や人材を活用したことは、児童の主体的な学習や具体的・実感的な理解につながり、より一層国際協力に対する認識を深めることができた。

今後は、講師派遣やテレビ会議システムの活用、ユニセフ学校募金への協力など、より効果的な学習の在り方を探っていきたい。